

委託事業実施内容報告書

平成24年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【地域日本語教育実践プログラム(A)】

受託団体名 インターカルト日本語学校

1. 事業名称

台東区に住む外国人と共に支え合うための日本語教育プロジェクト

2. 事業の目的

台東区に住む外国人が地域社会に密着し、その生活基盤の上で共に暮らす日本人及び外国人と共に、言語や文化を相互に尊重しながら日本語で意思疎通を図り生活できるようにすること。日本語教室の設置・運営においては、来日間もない外国人、及び地域との関係が希薄な外国人（特に子供をもつお母さん）が地域社会と密接につながりを持ち、その中で地域の一員として生活し、日本人及び他の外国人たちと共に日本社会で生きていくために必要な日本語能力を養う。また、日本の文化・社会・習慣の体験を通してその理解を深め、地域社会に参加し、地域での生活を円滑に行えるようにし、ひいては日本社会における自己の実現にまでつなげることを目的・目標とする。人材の養成においては、「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案を理解しながら、多種多様な外国人に対してはどのように使い方が有効か共に学ぶ。

また、日本語学校の特性を生かし、生活者向けのテキストの紹介と分析、使い方を共に学ぶことを目的とする。教材の作成は、ニーズ分析を十分に行い、学習者に必要な教材を作成する。また、学習者が参加した教室内でより効果的に日本語を学習することができることを目的とする。

3. 事業内容の概要

「生活場面とのつながり」「社会参加」「課題解決」「対話による相互理解と協働」「外国人当事者の参画」「自己表現」をキーワードとし、その達成のために、外国人(学習者としての外国人と、すでに日本社会で生きる外国人)、日本人(日本語指導者と、外国人と共に地域に行き共に学ぶ存在としてのボランティア)、それらすべてが参画する形で成立する「日本語教室」「人材の養成・育成」「学習教材の作成」プログラム。

企画にあたっては、「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案、ガイドブック、教材例集、能力評価を参考にし、地域に根ざした独自の、効果的・実践的なプログラム内容。

4. 運営委員会の開催について

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題	検討内容
1	平成24年6月30日 13:00~15:00	2時間	インターカルト日本語学校	西原鈴子 加藤早苗 矢部まゆみ 田中美穂子 谷口真理	今年度事業の運営について	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の目的につて ・インターカルトの地域実践プログラムの内容について ・3つの事業(教室、研修、教材)をどう関連付けていくのか。
2	平成24年7月28日 13:00~15:00	2時間	インターカルト日本語学校	西原鈴子 加藤早苗 矢部まゆみ 田中美穂子 谷口真理	具体的な運営について	<ul style="list-style-type: none"> ・ニーズ調査の必要性 ・研修についての具体的内容について ・日本語教室を運営する講師の研修について ・この事業と地域の関わるについて ・教材作成をどのような形とするのが良いか
3	平成24年9月15日 10:00~12:00	2時間	インターカルト日本語学校	西原鈴子 加藤早苗 矢部まゆみ 谷口真理	日本語教室と教材作成について	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的に教材をどのように作成していくか ・文化庁が求める教材について ・日本語教室の運営について ・募集の状況
4	平成25年3月16日 10:00~12:00	2時間	インターカルト日本語学校	西原鈴子 加藤早苗 矢部まゆみ 谷口真理	全体の振り返り、反省、報告	<ul style="list-style-type: none"> ・全20回の教室を終えての反省と振り返り ・人事育成の講座の評価と反省 ・教材作成の内容の確認 ・文化庁の視察で指摘された点を来年度にどうつなげるか

【写真】



5. 日本語教室の設置・運営

(1) 講座名称

台東区に住む外国人のための日本語教室～子供をもつお母さんを支援する教室～

(2) 目的・目標

来日間もない外国人、及び地域との関係が希薄な外国人(特に子供をもつお母さん)が地域社会と密接につながりを持ち、その中で地域の一員として生活し、日本人及び他の外国人たち

と共に日本社会で生きていくために必要な日本語能力を養う。また、日本の文化・社会・習慣の体験を通してその理解を深め、地域社会に参加し、地域での生活を円滑に行えるようにし、ひいては日本社会における自己の実現にまでつなげることを目的・目標とする。

(3) 対象者

来日間もない、生活するための日本語習得を目指す台東区に住む外国人。
主に子供を持つ「お母さん・お父さん」を対象とする。

(4) 開催時間数(回数) 62 時間 (全 20 回)

(5) 使用した教材・リソース

- ・自作教材
- ・『「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案 教材例集』
- ・みんなの教材サイト <https://minnanokyozai.jp/kyozai/login/ja/render.do>

(6) 受講者の総数 15 人

(出身・国籍別内訳：インド 10 人、中国 4 人、エジプト 1 人)

(7) 受講者の募集方法

- ・過去文化庁委託授業として開講した教室参加者への電話連絡
- ・近隣の商店(主に料理店や宝石店など)や教会、住宅へのチラシ配布と口頭案内
- ・近隣小児科、学校、保育園へのチラシ配布と口頭案内
- ・交流促進課、教育委員会支援課にお知らせ配布依頼
- ・外国人宅訪問、ポスティング

(8) 日本語教室の具体的内容

回数	開講日時	時間数	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要	講師又は指導者数	講師又は指導者名	補助者数	補助者	備考
1	平成24年10月17日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	5人	インド(2人)中国(2人) エジプト(1人)	自己紹介	日本語や数字のジェスチャーゲームなどを交えながら、初対面のあいさつと簡単な自己紹介をする。茶道体験し、お茶を楽しむ。 話しながら、講師はニーズ調査のヒアリングを行う。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
2	平成24年10月24日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	7人	インド(4人)中国(2人) エジプト(1人)	自己紹介②、自分のことを話す	他者に向けたスピーチスタイルの自己紹介をする。その後自分の家族・好きなこと(趣味)について話す。書面などで問われたときに、自分のことが書けるようにする。(氏名・住所・電話番号…など)	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
3	平成24年10月31日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	6人	インド(3人)中国(2人) エジプト(1人)	これからの目標・希望を話す	標準的カリキュラム案の『教材例案』や台東区資料などを用いて、生活に関わる色々な事例について話し、学習者が今後どうなりたいか、どのような学習をしていきたいかということを出し、学習者と指導者が互いに共有できるようにする。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
4	平成24年11月7日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	6人	インド(3人)中国(3人)	健康・安全に暮らす①	①台東区の医療サービスについて話し、情報を共有する。②普段しようしている薬の種類や用法・用量がわかり、処方された時に対応できるようにする。③体の各部位の名称がわかる。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
5	平成24年11月14日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	6人	インド(4名)中国(2名)	健康・安全に暮らす②	①体の各部位の名称が言える。②病気の時、症状の簡単な説明ができるようになるために、会話練習をする。③診療科の種類を知り、病院に行った際に対応できるようにする。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
6	平成24年11月21日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	7人	インド(5名)中国(2名)	冠婚葬祭の習慣を知る	①日本と自国の冠婚葬祭について話す。②日本の冠婚葬祭の習慣について知り、時宜に応じたあいさつや対応ができるようになる。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
7	平成24年11月28日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	7人	インド(5名)中国(2名)	災害に備え、対応する	①地震発生時の避難場所、避難方法、取るべき行動について話す。②地震発生時の非常持ち出し品を確認する。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
8	平成24年12月5日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	7人	インド(5名)中国(2名)	年間行事を知る	①日本の年中行事について知る。②日本と自国の年中行事について話す。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
9	平成24年12月12日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	7人	インド(4名)中国(3名)	年末年始のあいさつ	①年末年始のあいさつができるようになる。②年賀状を書き、教室内の知人に出す。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
10	平成24年12月19日 10:00~14:00	4時間	インターカ ルト日本語学校	7人	インド(5名)中国(2名)	日本料理を作る 年末年始の食文化を知る	①調理の語彙を知り、実際に日本の料理を作る。②食事の場を共有し、今年を振り返りながら話す。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
11	平成25年1月9日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	7人	インド(5名)中国(2名)	年始のあいさつ	①日本と自国の新年の習慣について話す。②書初めをして、一年の目標を発表し合う。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
12	平成25年1月16日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	6人	インド(4名)中国(2名)	料理①	①日本と自国の料理について話す。②自信のある料理の作り方を書いて発表する。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
13	平成25年1月23日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	7人	インド(5名)中国(2名)	料理②	①調理に関する言葉を知る。②日本にどんな料理があるのか話し合った後、料理の工程や材料からどんな料理なのか予想する。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
14	平成25年1月30日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	6人	インド(5名)中国(1名)	料理③	①調理方法に関する言葉を知る。②日本の代表的な料理の作り方を知る。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
15	平成25年2月6日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	7人	インド(5名)中国(2名)	旅行①	②調理器具に関する言葉を知る。②レシピの書き方を確認した後、自分の得意料理のレシピを書く。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
16	平成25年2月13日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	7人	インド(5名)中国(2名)	旅行②	①旅行に関する言葉を知る。②東京の観光地について、自分の経験も交えながら話す。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
17	平成25年2月20日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	7人	インド(5名)中国(2名)	旅行③	②交通手段に関する言葉を知る。②日本の名所について、自分の経験も交えながら話す。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
18	平成25年2月27日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	7人	インド(5名)中国(2名)	買い物①	①買い物をする場所、そこで買うものについて話す。②店員に商品の値段を問うようになる。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
19	平成25年3月6日 10:00~13:00	3時間	インターカ ルト日本語学校	8人	インド(6名)中国(2名)	買い物②	①よく行くスーパーや、そこで買う商品について話す。②スーパーの商品に関する情報(陳列場所、原材料、産地など)を店員に問うようになる。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理
20	平成25年3月13日 10:00~14:00	4時間	インターカ ルト日本語学校	8人	インド(6名)中国(2名)	買い物③	教室に近いスーパーへ行き、買い物をする。	7名	有田玲子、大崎紀子、田栗春菜、中島佐知恵、中館まり子、穂坂晴子、矢口奈緒子	なし		保育 谷口真理

(9) 特徴的な授業風景(2~3回分)



(10) 目標の達成状況・成果

教室の最終回に、学習者全員にアンケートを行い、主に以下の回答を得た。

- ・「知らなかった言葉を知ることができた。」
- ・「間違っていた言葉を直してもらえた。」
- ・「スーパーで買い物をする時に役に立った。」
- ・「宗教上、肉が食べられないので“豚肉・牛肉”などの漢字を勉強したことによって食品表示を見る際に立つようになった。」

したがって、生活の中で効果を感じた学習者もいたように思われるため、「標準的カリキュラム案」を活用した活動作りが多少の効果を生んでいたのではないかと考えられる。しかし、学習者からは「教室に参加することで、“他とつながれる”」といった類の回答は見られなかったため、今後はそうした教室作りを目指さなければならないと思う。

(11) 改善点について

課題は大きく以下2点が挙げられる。

① 地域とのつながりを強化する

本教室に参加する学習者は、知人のネットワークをたどって教室の存在を知ったという人が多く、最後までその域を出ることがなかった。そのため、今後は広報活動をより広く行っていく必要があると考えている。具体的には、台東区交流促進課に「ボランティア日本語教室一覧」のひとつとして外国人住民に情報が伝わるように要請をする予定である。また、今年度は近くの小学校・幼稚園・保育園にチラシを配布したが、来年度はチラシ配布を広域にわたって広報活動を行う予定である。

また、文化庁の視察の際に、もっと地域リソースを活用するようご意見をいただいた。活動に地域ボランティアの方に参加していただく、活動内容に地域自治体・組織の方に講師として参加していただく、課外活動を活発に行い、地元商店街とのつながりの場を増やす、などを予定している。

②ニーズ調査を効果的に行う

今年度、学習者に対してニーズ調査を行ったが、その結果を教室内容(各テーマの順、活動内容など)に効果的に生かすことができなかった。来年度は、学習者のニーズにより沿った形で活動を展開できるような、カリキュラム案の活用の形を考えなければならない。具体的には、来年度 5 月の教室開始時に学習者にアンケートを行い、教室内容を再度検討することを考えている。

6. 日本語教育を行う人材の養成・研修の実施

(1) 講座名称 地域日本語指導者養成講座

(2) 目的・目標

- ・「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について理解する。
- ・「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案の活用方法を共に考える。
- ・来日する外国人の背景を理解する。
- ・生活する外国人向けのテキストの紹介と使い方を学ぶ。
- ・学習者を飽きさせない話題づくりについて学ぶ。

(3) 対象者 地域日本語教室ボランティア、外国人支援にたずさわっている方

(4) 開催時間数(回数) 25.5 時間 (全 8 回)

(5) 使用した教材・リソース

- ・標準的なカリキュラム案冊子
- ・Weekly J
- ・きらり日本語
- ・講師オリジナルの資料

(6) 受講者の総数 30 人
(出身・国籍別内訳 日本 30 人)

(7) 受講者の募集方法

- ・当校 HP
- ・ボランティア団体、国際交流協会に配布
- ・交流促進課チラシ設置
- ・前年度参加者へ通知

(8) 養成・研修の具体的内容

回(※)	開催日	時間数	受講人数	会場	内容
①	10月20日(土)	3.5 時間	24 人	インターカルト日本語学校	○生活者としての外国人が直面する課題と支援文化庁「標準的カリキュラム案」ができるまで ○ちょっと元気になるための教室づくり・難民等定住外国出身者と共に
②	11月10日(土)	3.5 時間	29 人	インターカルト日本語学校	○外国人と地域社会をつなげる日本語教育プログラムの作成 ～多文化共生を考えるワークショップ～ ○ボランティア教室立ち上げから今日まで
③	12月7日(金)	3 時間	25 人	インターカルト日本語学校	○地域の実情・学習者の状況に合わせた日本語教育のための教材 ～生活課題の解決、地域住民とのつながり作り、社会参加に向けて～ ○演習：行動・体験中心の教室活動のための教材作成
④	12月15日(土)	3 時間	24 人	インターカルト日本語学校	日本語学習ニーズと日本語学習支援の在り方 ～生活者の立場から～
⑤	1月19日(土)	3 時間	26 人	インターカルト日本語学校	体系的に興味をもって語彙を増やす授業 (1) ～日本語能力試験に挑戦「きりり☆日本語N5語彙」を使って～
⑥	2月9日(土)	3 時間	25 人	インターカルト日本語学校	日本語でコミュニケーションができるようにするための授業(1) ～文型・語彙・表現を自然に身につける「WEEKLY J」を使って～ その考え方、授業の構成、方法と理解と実践
⑦	2月16日(土)	3 時間	24 人	インターカルト日本語学校	日本語でコミュニケーションができるようにするための授業(1) 外国人を対象とした授業実習と振り返り
⑧	3月2日(土)	3.5 時間	25 人	インターカルト日本語学校	体系的に興味をもって語彙を増やす授業 (2) 外国人を対象とした授業実習と振り返り 全体の振り返り まとめ

(9) 特徴的な授業風景(2～3回分)



(10) 目標の達成状況・成果

毎回アンケートを実施。最終回に全体のアンケートを行う。全体的には、概ね講座内容には満足との回答でしたので、目的はほぼ達成できたと思う。

<講座の感想>

- ・生活者としての外国人に必要な日本語がどのようなものなのか、標準的カリキュラム案の存在を知ることができ、今後のプログラム作りに役立つと思った。
- ・日本語ボランティアの意義の大きさ各々の生徒の必要な助けを把握する大切さ等お話の全てが良かった。
- ・地域で日本語を必要としている人々の実際の姿が少し見えてきた。
- ・多文化共生というものを考えさせられました。共生と同化という言葉が印象に残りました。
- ・他のボランティアの方たちの意見や課題など交換ができてよかった。
- ・学習者の生活に密着した教材としてまた、楽しく学べる教材として誕生日や四季の画像をプリントして会話する方法が役にたった。
- ・地域の実情・学習者の状況などいろんなグループの話が聞けて問題点など共有できたことが良かった。
- ・講師ご自身が日本語学習者として苦労なされた体験など伺うことができ、とてもリアルに外国の方々が抱えている問題などを知ることができた。支援のあり方について考えるいい機会になった。
- ・コミュニケーションのベース・手段としての言語が必要であるが、それだけでは終わらず「文化教育制度の国際間の違いの理解」がなければ言語も完全に教授できないであろう難しさをつくづく知らされた。
- ・can-do の自己評価についてのお話は大変参考になりました。レベルの目安は客観的な理解に役立つと思いました。
- ・語彙を増やす方法がわかって良かった。
- ・学習者を楽しませて、発展させ、頭に残す学習方法が理解できた。ボランティア教室で実践したい。
- ・講座の内容が実践的、具体的だったので、教室で取り入れたいと思う。

(11) 改善点について

- ・標準的カリキュラム案の普及を考え行政に参加を促したが、土曜日とのこともあり、参加が叶わなかった。
- ・台東区のボランティア団体に多く参加してほしかったが、行政が行っている講座と時期が重なっていたので、参加者が分かれてしまった。今後は、台東区がボランティア向きに行っている講座の時期など考慮する必要がある。
- ・標準的カリキュラム案と実際に教える内容をどのような形で講座にするかが決まるまでに、か

なり時間を要してしまったので広報活動が十分できなかった。

・標準的カリキュラム案について知ることと、後半の講座の実際に教える内容の関連づけが十分にできなかった。

7. 日本語教育のための学習教材の作成

(1) 教材名称:「台東区に住むお母さんのための日本語学習教材」

(2) 対象:台東区在住の、来日後間もない日本語学習者。

主に子どもを持つ「お母さん」を対象としているが、それ以外にも使用可能。

ゼロ～初級程度の日本語学習経験者を想定しているため、在住期間が長くてもこれに相当すれば教材使用の対象となる。

(3) 目的・目標:本教材の使用により、日本に来て間もない、あるいは在住期間は長いが日本語学習期間が短いゼロ～初級程度の日本語経験を持つ学習者が、参加した教室内でより効果的に日本語を学習することができることを目的とする。また、その学習を通して学習者が少ない語彙でも自分のことを話せるようになることが理想である。

さらに、教材を使用する「活動案」も付して、各教材使用場面におけることば・表現の例を示したことで、使用者(講師および協力者)が各現場における活動内容を整理しやすくなることを目的としている。

(4) 構成:教室 1 回の活動に対し、1つの「教材案」と複数の各種教材を付した。教室は全 15 回で構成した。各種教材は「語彙シート」「絵カード」「タスクシート」「会話例」という4種のいずれかで、内容及び枚数は活動によって異なる。

(5) 使い方:指導者は、各回のテーマを教室で実践する際、「活動案」の例を活用して自分の教室で行う活動案を組み立てる。その際、対応する各種教材を用いて学習者の発話につなげる。「活動案」における各活動の例は、順不同に行ってもかまわない。

(6) 具体的な活用例 :第 15 回では、教室内で教材を用いて「スーパーの商品」に関する語彙を学び、店員に商品の場所・食品表示・産地について質問する会話の練習を行う。その翌週に、課外活動として実際にスーパーに行き、買い物を行うという活動が想定されている。

8. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的

台東区に住む外国人が地域社会に密着し、その生活基盤の上で共に暮らす日本人及び外国人と共に、言語や文化を相互に尊重しながら日本語で意思疎通を図り生活できるようにすること。

日本語教室の設置・運営においては、来日間もない外国人、及び地域との関係が希薄な外国人(特に子供をもつお母さん)が地域社会と密接につながりを持ち、その中で地域の一員として生活し、日本人及び他の外国人たちと共に日本社会で生きていくために必要な日本語能力を養う。

また、日本の文化・社会・習慣の体験を通してその理解を深め、地域社会に参加し、地域での生活を円滑に行えるようにし、ひいては日本社会における自己の実現にまでつなげることを目的・目標とする。人材の養成においては、「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案を理解しながら、多種多様な外国人に対してはどのように使い方が有効か共に学ぶ。

また、日本語学校の特性を生かし、生活者向けのテキストの紹介と分析、使い方を共に学ぶことを目的とする。教材の作成は、ニーズ分析を十分に行い、学習者に必要な教材を作成する。また、学習者が参加した教室内でより効果的に日本語を学習することができることを目的とする。

(2) 目標の達成状況・事業の成果

日本語教室は、これまでとは違った国籍の方に参加していただくことができた。

ニーズ分析を丁寧に行い、ある程度、ニーズに合った指導をすることができた。1か月のテーマを決めることにより、その場限りの指導に終わることなく大きな流れの中で指導することができた。講師内で、取り組みの担当を決めて教材を作成し、事前に使い方の説明など全員で共有することができ、指導もスムーズに行うことができた。教室終了後に教室運営、教材に関しての反省会を行い、より使いやすい教材を作成することができた。ニーズ分析の大切さは、標準的カリキュラム案の研修を通して学ぶことができ、教室運営を考えていくうえで役に立った。また、他のボランティア団体の方との意見交換ができ、他の団体の活動について知ることができたこと、また問題の共有や解決に向けての話し合いなど有意義は時間を持てた。

日本語学校の特性を生かし、実際の外国人学生に入ってもらい、学習者からどう話題を引き出すかを体験できたことに対しての評価は高かった。

(3) 標準的なカリキュラム案の地域での活用について

・地域で暮らす外国人に最低限知っておいてほしいテーマは網羅していたので、それにしたがってある程度は活用できたが、標準的カリキュラム案をいかに自分たちの地域に活かして指導していくかが今後の課題である。

・日本語教室作りのニーズ調査に使用したが、項目が多すぎて時間がかかってしまった。

そのまま使用するのではなくて、地域に必要な項目を抜粋して使用したほうが良い。

(4) 地域の関係者との連携による効果, 成果 等

・区の行政とはある程度つながりは持てた。また、当校の行っている委託事業に関しては理解してくれたが、連携まではなかなか進まなかった。

地域の関係者に関しては、近くの商店街の会長、副会長に当校で行った地域の外国人、インターカートの学生対象の「PHOTO CONTEST」の写真展示と投票の協力をお願いした。快く引き受けてくださり、お知らせの設置や各商店への宣伝なども行ってくれた。「PHOTO CONTEST」のタイトルは「外国人がみた台東区」。

(5) 改善点, 今後の課題について

・標準的カリキュラム案があるということをすべてのボランティアに知ってもらうことが必要。そのためにも「標準的カリキュラム案」から、どのように考えて、どんな教材を作って、どんな授業にするのか、その一つ一つを丁寧に伝え、広められる人材が必要である。

そのためにも標準的カリキュラム案に特化した研修をすべきである。

・行政との連携がなかなか進まないこと。来年度は、まず地域の人たちとのつながりを優先して、地域の人たちが参加できる企画を考えていきたい。「PHOTO CONTEST」は大好評だったので、展示の場を近くの商店街だけではなくて、他の商店街にも広げていきたい。挑戦として、区の生涯学習センターや区役所内での展示を実現したい。地域から行政への広がりを考えていきたい。

・教材作成は、ニーズ分析を行って上で、取り組みをプログラムして作成する手順で行ってきたがニーズ分析上で学習者が今勉強したいことが話題の中心になり、「生活者として」から離れてしまうことがあった。ニーズ分析する上である程度分析する内容を決める必要性があった。来年度は、内容ある程度選んで実施する。